

文化財通信

第11号



令和元年 12 月



京 都 府

ごあいさつ

京都府では、平成20年7月にいわゆる「ふるさと納税」制度を利用し、府内に所在する歴史的建造物の保存、修理や防災対策など「文化財保護」にその用途を限定する全国で唯一の「文化財を守り伝える京都府基金」を設置しました。それから11年が経過し、これまでの御寄附は2,980件、総額1億8,600万円余りとなりました。全国の皆様方から御厚志を賜り、改めて心からお礼申し上げます。

また、この基金を利用し、平成21年度から30年度までの10年間で204件、総額1億6,500万円余りを文化財保護のために支出しており、文化財を所有する方々から感謝のお言葉を頂戴しているところで

す。さて、今年はふるさと納税制度の見直しが行われたこともあり「文化財を守り伝える京都府基金」を取り巻く環境も大きく変わってきています。京都の宝である文化財を守り、次代に引き継いでいくために、これまで以上に当基金を広く皆様に知っていただけるよう努めてまいりたいと考えております。

これまで取り組んでまいりました文化財の保存、修理や防災対策は、京都の文化を大切に守り伝えてきた多くの方々、また京都の文化を愛する方々の御理解・御協力の賜物であると考えております。今後とも皆様方と一緒に京都の文化・文化財の保護に尽力してまいりますので、皆様の一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。



令和元年12月

京都府知事 西脇 隆俊

『文化財通信』表紙の「常磐色」と「若菜色」

常磐色

この『文化財通信』表紙の題字には「常磐色」（濃い緑）を使用しています。『源氏物語』で、光源氏は、六条御息所を野宮に訪ね、彼女に対する変わらぬ恋心を、永久不変の樹木の緑に例えて、「常磐色」と言っています（賢木巻）。また、表紙の背景は「若菜色」（淡いうぐいす色）を用いました。同じく『源氏物語』で、光源氏の40歳の祝いの席で、養女の玉鬘が若菜を差し出した（若菜巻）ことにちなんで、このようなうぐいす色を用いました。永遠の「常磐」と寿ぐ「若菜」に文化財の保護と継承の願いを託したものです。

若菜色

目 次

公益財団法人日新電機グループ社会貢献基金との 京都の歴史的文化財の保護等のための連携・協力に関する協定について・・・	1
寄附で保護される京都の文化財 ～平成30年度に実施した事業について～	・・・ 2
御寄附いただいた方々への京都文化体験(レポート)	・・・ 7
平成30年度の寄附状況について	・・・ 10
「文化財を守り伝える京都府基金」の概要	・・・ 11

文 化 財

こ ぼ れ 話 14

○ 旗本藤懸氏と君尾山光明寺

君尾山光明寺は綾部市睦寄町君尾に所在する真言宗醍醐派の山岳寺院です。聖徳太子創建の伝承を持ち、かつては数多くの坊を抱える大寺院でした。

仁王門は京都府北部唯一の国宝建造物として有名ですが、本堂も府指定の建造物です。

光明寺は1527年、1572年、1579年と相次いで兵火に遭い伽藍を消失しましたが、江戸時代に入ると綾部市八津合町上林に所領を持った旗本藤懸氏が代々復興を支援しました。

初代当主 藤懸永勝は織田氏の一族で、若くして信長に仕え、秀勝、秀吉と主君が変わりましたが、関ヶ原の戦いで西軍として丹後田辺城攻めに加わりました。その後減封され上林に入部したのです。

府指定の本堂は1836年、藤懸左京の支援を受け建立しました。この本堂の前には2基の石灯籠が立っていますが、一方は梵鐘を改鋳した永勝が、もう一方は1685年に本尊を寄進した永次がそれぞれ寄進したもので、今も本堂の前で復興した光明寺を見守っています。



藤懸永次が寄進した石灯籠